

在籍校名 福津市立福間中学校
職・氏名 教諭 山脇 泰季

研 修 報 告 書

このたび、長期派遣研修員として、下記のとおり研修をしましたので報告いたします。

記

1 研修種別

D 福岡県教育センター研修員

2 主題研修について

研究主題 地域的特色の成立条件を多面的・多角的に考察する生徒を育てる中学校社会科地理的分野
学習指導－関連図の操作・活用を位置付けた単元構成を通して－

(1) 研究のねらい

ア 課題の背景

中央教育審議会答申(平成 28 年 12 月)において「資料から読み取った情報を基にして社会的事象の特色や意味などについて比較したり関連付けたり多面的・多角的に考察したりして表現する力の育成が不十分であること」が指摘されている。このことから、地理的分野では、資料から読み取った情報を根拠にして、地域的特色を成り立たせる要因を多面的・多角的に考察することができる生徒が求められていると考え、本主題を設定した。

イ 研究の目的

地理的分野「日本の諸地域」の学習において、地域的特色の成立条件を多面的・多角的に考察する生徒を育てるために、関連図の操作・活用を位置付けた単元構成の有効性を究明する。

ウ 研究の仮説

地理的分野「日本の諸地域」の学習で、関連図を操作・活用しながら考察する活動を中心に位置付けた単元構成において、次のような手立てを講じれば、様々な事象がどのように影響を及ぼし合っているかを捉えられるため、地域的特色の成立条件を多面的・多角的に考察する生徒が育つであろう。

<手立て 1> 予想を基に事象の関連を捉える問いと交流活動

<手立て 2> 関連図の操作・活用を促す ICT 活用

(2) 研究の構想

ア 主題の説明

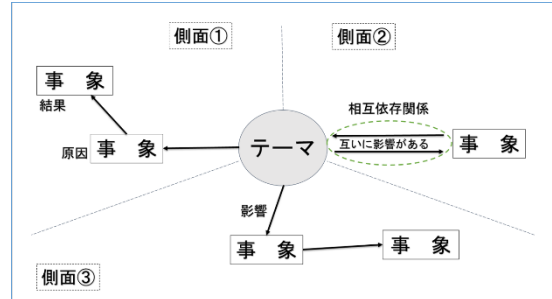
(ア) 主題について

「地域」とは、一定の空間的広がりをもつ区域である。本研究では、「地域」を日本の七地方区分の各地方とする。「地域的特色」とは、他の地域とは異なる特徴のことであり、「成立条件」とは、地域的特色を成り立たせる要因である。地域的特色は、様々な事象のかかわりの中で生み出されている。そのため、地域的特色の成立条件は多面的・多角的に考察する必要がある。「多面的・多角的に考察する」とは、「自然環境」「人口や都市・村落」「産業」「交通や通信」などの側面や、「地域内外の人々」と事象との関係を踏まえて成立条件を明らかにすることである。「地域的特色の成立条件を多面的・多角的に考察する」とは、地域の特色を端的に示す事象(以下「テーマ」)を中核にして、他の事象との多様な関連から地域的特色を捉え、その要因を明らかにすることである。そこで、本研究では次の姿を目指す。

- 地域の広がりや地域内の結び付き、人間の営みに着目して、テーマと他の事象との多様な関連を考察することができる生徒 【思考力、判断力、表現力等】
- テーマと他の事象との多様な関連を考察したことから、地域的特色を成り立たせる要因を文章で表現することができる生徒 【思考力、判断力、表現力等】

(イ) 副題について

「関連図」とは、様々な事象を関連付けながら生徒一人一人が自分の考えを整理する図である。関連図は、テーマとテーマとの関連を考察する複数の側面で構成されている(資料1)。「操作」とは、資料から読み取った複数の事象を図中に書き出し、「原因と結果」「相互依存」など事象と事象の関係性が分かるように線や矢印で結ぶことである。「活用」とは、操作して分かったことを整理したり比べたりして、その内容を語句や文章で表すことである。



資料1 関連図の構成

表1 単元における関連図の位置付け

本研究では、単元を「つかむ」「さぐる」「まとめる」の三段階で構成し、「さぐる」段階に関連図の操作・活用、「まとめる」段階に関連図の活用を位置付ける(表1)。

段階	「つかむ」段階	「さぐる」段階	「まとめる」段階
目的	テーマを決定し、関連付ける側面を選択する	テーマと他の事象との関連を考察する	地域的特色を成り立たせる要因を考察し文章で表す
関連図	関連図の枠組みの作成 ・ 地域の特徴を調べ、テーマを決定して図に示す。 ・ 話し合いを通して関連付ける側面を選択し、関連図の枠組みを作成する。	関連図の操作・活用 ・ 資料を読み取り、複数の事象を関連図に書き出す。 ・ 「原因と結果」などの関係性が分かるように複数の事象を線や矢印で結ぶ。 ・ 関連の共通点を明らかにする。	関連図の活用 ・ 「さぐる」段階で見つけた共通点をもとに、地域的特色を文章で説明する。 ・ 関連図を根拠として、地域的特色を成り立たせる要因を文章で説明する。

「つかむ」段階では、まず、テーマを決定し、関連図の中心に示す。そして、テーマとの関連を考察する側面を選択する。その後、選択した側面に応じて、関連図の枠組みを作成する。「さぐる」段階では、まず、資料を読み取り複数の事象を関連図に書き出す。次に、「原因と結果」などの関係性が分かるように複数の事象を線や矢印で結ぶ。その後、関連の共通点を明らかにする。このような操作・活用を側面ごとに繰り返す。「まとめる」段階では、作成した関連図を基に地域的特色を整理する。そして、地域的特色の要因を文章で説明する。このように、選択した複数の側面を踏まえ、関連付けたことを図に整理、記録しながら操作と活用を繰り返すことで、地域的特色の成立条件を多面的・多角的に考察できると考える。

イ 研究の内容

(7) 予想を基に事象の関連を捉える問いと交流活動

関連図を操作・活用するためには、様々な事象の関連付けが促される仕組みが必要である。川端(2021)は、「発問の質の差を考慮して段階を踏むことで、生徒が答えることに前向きになります。そして、『どのように』

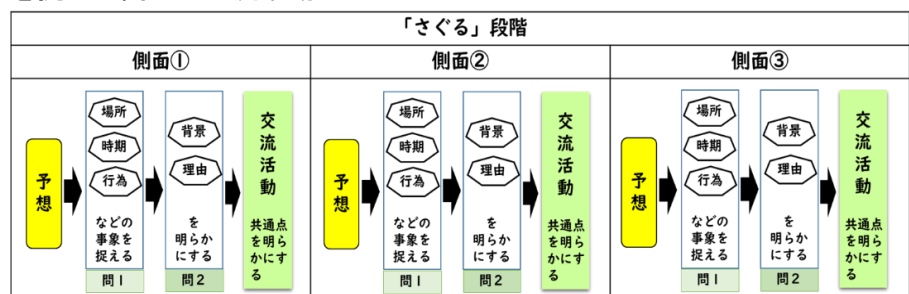


図1 問いと交流活動の流れ

や『なぜ』の発問をされても、生徒は途方に暮れず、予想や考察を進めることができます。」¹⁾と述べている。そこで、様々な事象の関連を明らかにするための問いの提示と関連図で見いだした様々な事象の関連を共有する交流活動を設定する(図1)。生徒は、課題に対する予想を基に「問1 場所や時期、行為などを捉える問い」で具体的な事象を捉える。そして、「問2 背景や理由を明らかにする問い」でテーマと他の事象との関連を明らかにし、課題に対する考えを整理する。交流活動では、他者と関連図を比較することで、考えを付加・修正し、関連の共通点を明らかにする。

(4) 関連図の操作・活用を促す ICT 活用

関連図は、生徒が一人一台端末で作成する。「さぐる」段階では、生徒は、関連図の事象を何度も入れ替えて考えたり、自他の関連図の比較を通して考えを付加・修正したりすることでテーマと他の事象との関連を明らかにする。「まとめる」段階では、生徒はそれまでの学習の内容や過程を関連図で振り返ることで、地域的特色とその要因についての考えをまとめて文章で表す。以上のように、学習活動の試行錯誤や情報の蓄積、思考の可視化が容易であるという ICT の特性を生かし、関連図の操作・活用を促していく。また、関連図は、生徒の学習履歴(スタディ・ログ)として、学習後も活用していくことが可能である。

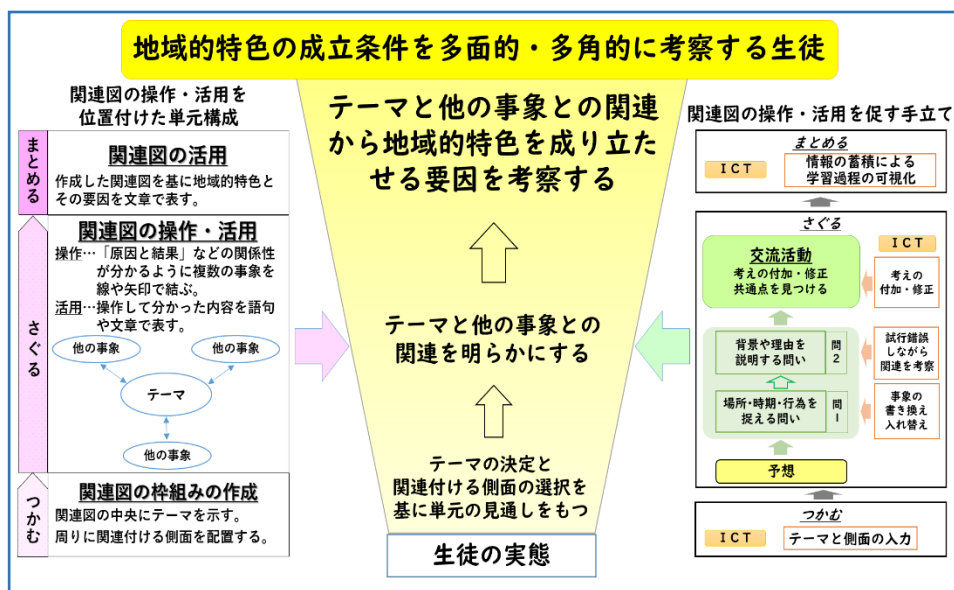


図2 研究構想図

(3) 研究の実際

ア 実証授業の学年及び単元計画(全5時間) A市立B中学校第2学年C組38名

単元	地理的分野 日本の諸地域 「北海道地方」		
目標	<ul style="list-style-type: none"> ○ 地図や景観写真などの資料を基に、北海道の自然環境の特色や北海道で暮らす人々の生活、及び農業や観光業の特色と北海道の課題を理解することができる。 【知識及び技能】 ○ 地域の広がりや地域内の結び付き、人々の営みに着目して、北海道の自然環境を他の事象と関連付けて考察したことから地域的特色やその要因を表現することができる。 【思考力、判断力、表現力等】 ○ 北海道地方の課題について主体的に追究しようとしている。 【学びに向かう力、人間性等】 		
段階	学習活動	手立て	配時
つかむ	1 北海道の特色を示す事象(自然環境)を調べ、学習課題をつくる。	○ 北海道地方の特色を示す事象(自然環境)を把握するために、位置や土壌の分布などが分かる資料を提示する。	1
さぐる	2 自然環境と他の事象の関連を調べ、考えをまとめる。 (1) 自然環境と人々の生活について調べ、関連を考察し関連図に入力する。 (2) 自然環境と農業について調べ、関連を考察し関連図に入力する。 (3) 自然環境と観光業について調べ、関連を考察し関連図に入力する。	○ 自然環境と他の事象を関連付ける見通しをもつために、課題に対して予想をたてる場を設定する。 ○ 自然環境と他の事象との関連を明らかにするために、問いを提示し、交流活動を設定する。	3
まとめる	3 自然環境と他の事象との関連を考察したことから、地域的特色やその要因、地域の課題を文章で記述し、説明する。	○ 根拠を明確にして北海道の地域的特色やその要因を説明するために、関連図を用いて考察したことを振り返る場を設定する。	1

イ 実証授業の実際と考察

(7) 「つかむ」段階(第1時)

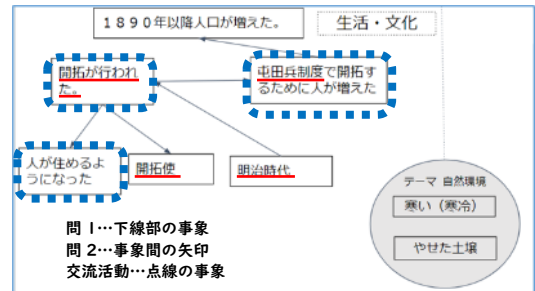
第1時では、テーマを決定し、関連付ける側面を選択することで、単元の見通しをもつことをねらいとした。生徒は、地図やグラフから北海道の特徴を調べてテーマを決定し、話し合いで関連付ける側面を選択した。まず、日本地図や雨温図から「北に位置するから寒い。」や「泥炭地や火山灰土などの農業に向かない土壌が広がっている。」と北海道の気候や土壌の特徴を調べた。調べた内容を学級で交流し、自然環境の特徴(寒い・やせた土壌)をテーマに決定した。これは、位置や土壌の分布に着目することで、北海道の特色を端的に示す事象を捉えた姿だと考える。次に、人口推移に関するグラフから、明

治時代以降に人口が増えたことに対する共通の疑問点を見だし、学級で「寒冷でやせた土壌が広がる中、どのように生活をしてきたのだろうか。」という単元を貫く学習課題を設定した。課題解決に向けて関連付ける側面を決める話し合いでは、既習の知識や生活経験から「自然環境は生活様式や産業とのかかわりが深い。」と判断し、側面として「生活・文化」と「産業(農業、観光業)」を選んだ。その後、関連図に選択した側面を記入して枠組みを作成した。このような姿は、自らの学習を方向付けている姿だと判断する。これらのことから、テーマを決定することと関連付ける側面を選択することは、単元の見通しをもつ上で有効だったと考える。

(イ) 「さぐる」段階(第2～4時)

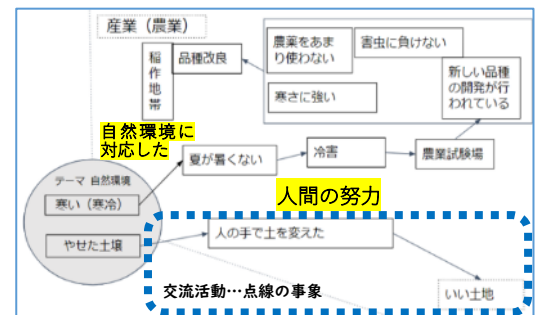
「さぐる」段階では、テーマと他の事象との関連を考察し、関連図に表した。

第2時は、北海道へ移住が進んだ背景を明らかにすることをねらいとした。まず、前時を振り返り、「生活・文化」にかかわる既習内容を事象として関連図に入力したところ、生徒Aは「1890年以降人口が増えた。」と入力した(資料2)。また、移住した場所や生活の様子を調べることにより、テーマと「生活・文化」との関連を考察できるのではないかと予想していた。ここで、問いを提示した。生徒Aは「問1 移住のきっかけは何だろう。」に対して、「開拓使」や「屯田兵制度」などの事象を関連図に入力した。次に「問2 多くの人が移住したのはなぜだろう。」に対して、生徒Aは問1で入力した事象と「1890年以降人口が増えた。」という事象を線で結ぶことができた。関連図を比較して他者と考えを共有する交流活動では、「屯田兵制度」と単語で入力していた事象を見直し、「屯田兵制度で開拓するために人が増えた。」と内容を付加した。生徒Aは、複数の事象を時系列で整理できたが、テーマとの関連までは考察できなかつた。



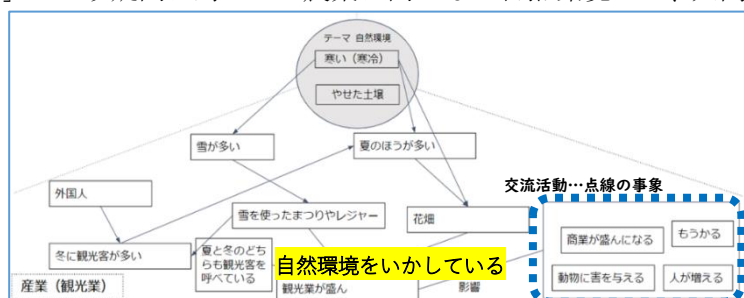
資料2 第2時終了時の生徒Aの関連図

第3時は、寒冷な気候とやせた土壌でも人々の工夫や努力によって、農業が発展したことを明らかにすることをねらいとした。まず、テーマと農業にかかわる事象との関連に気付かせるために、都道府県別の「農業産出額」の表を提示した。生徒は、「北海道は、寒冷でやせた土壌にもかかわらず農業産出額が高い。」と気付き、「なぜ、農業が盛んなのか。」という疑問をもった。その後、農地利用の違いを調べることにより関連を考察できるのではないかと予想していた。そこで、問いを提示した。生徒Aは「問1 北海道ではどこで、何が栽培されているのだろうか。」に対し、資料から「石狩平野が稲作地帯である。」と確認して、「稲作地帯」と事象を関連図に入力した(資料3)。次に「問2 どのようにして稲作を盛んにしたのだろうか。」に対し、生徒Aは「品種改良」とその特徴(「寒さに強い」など)を入力し、線で結ぶことができた。これは、「品種改良」という行為に着目することで、稲作が盛んな理由を明らかにした姿だと考える。また、交流活動において、生徒Aは、やせた土壌を改良したという別の特徴に気付き、「人の手で土を変えた」という事象を入力した。そして、「農業が盛んなのはなぜか。」という疑問に対して「農業に向かない自然環境だが、人間の努力によって盛んになった。」と発言した。このとき、生徒Aは交流で見いだした共通点を「人間の努力」、「自然環境に対応した」と関連図に入力していた。



資料3 第3時終了時の生徒Aの関連図

そこで、問いを提示した。生徒Aは「問1 北海道ではどこで、何が栽培されているのだろうか。」に対し、資料から「石狩平野が稲作地帯である。」と確認して、「稲作地帯」と事象を関連図に入力した(資料3)。次に「問2 どのようにして稲作を盛んにしたのだろうか。」に対し、生徒Aは「品種改良」とその特徴(「寒さに強い」など)を入力し、線で結ぶことができた。これは、「品種改良」という行為に着目することで、稲作が盛んな理由を明らかにした姿だと考える。また、交流活動において、生徒Aは、やせた土壌を改良したという別の特徴に気付き、「人の手で土を変えた」という事象を入力した。そして、「農業が盛んなのはなぜか。」という疑問に対して「農業に向かない自然環境だが、人間の努力によって盛んになった。」と発言した。このとき、生徒Aは交流で見いだした共通点を「人間の努力」、「自然環境に対応した」と関連図に入力していた。これは、他者と関連図を比較することで、気候や土壌に対する人々の工夫や努力に気付き、テーマと農業にかかわる事象との関連を明らかにした姿だと考える。



資料4 第4時交流活動後の生徒Aの関連図

明らかにした箇所を選ぶ活動や関連図を用いて学習を振り返る場の設定は、地域的特色を成り立たせる要因を考察し、表現する上で有効だったと考える。

(4) 全体考察

資料7は、関連図を基に、地域の広がりや地域内の結び付き、人間の営みに着目して、テーマと他の事象との関連を考察できたかどうかを分析したものである。テーマと他の事象がどのように関連付いているかを考察できた生徒は、第2時よりも第5時の方が20人増えた。これは、問いと交流活動において、生徒の予想を基に関連付けを行い、関連付けた内容を他者と比較して、共通点を見いだしたり考えを付加・修正したりしたからだと考える。

資料8は、関連図と文章の記述を基に、地域的特色を成り立たせる要因を多面的・多角的に考察し表現することができたかどうかを分析したものである。中部地方と比べて、多面的・多角的に考察できた生徒は17人増えた。これは、関連付ける側面ごとに問いと交流活動を設定し、関連図の操作・活用を繰り返したことで、側面ごとに関連付ける事象が整理されていたことが理由だと考える。また、ICTを活用して情報を可視化しながら蓄積することで、関連付けた内容を確認したり振り返ったりすることが容易であったことも理由と考える。単元の振り返りでは、「関連図を使ったことで、事象がどのようにつながっているか知ることができた。」や「単元を通して自分が考えたことが、最終的にまとめられていて北海道の特色が一目でわかった。」など、関連図を操作・活用したことの有効性を実感している生徒の姿があった。

以上のことから、関連図の操作・活用を位置付けた単元構成は、地域的特色の成立条件を多面的・多角的に考察する生徒を育てる上で有効であったと考える。

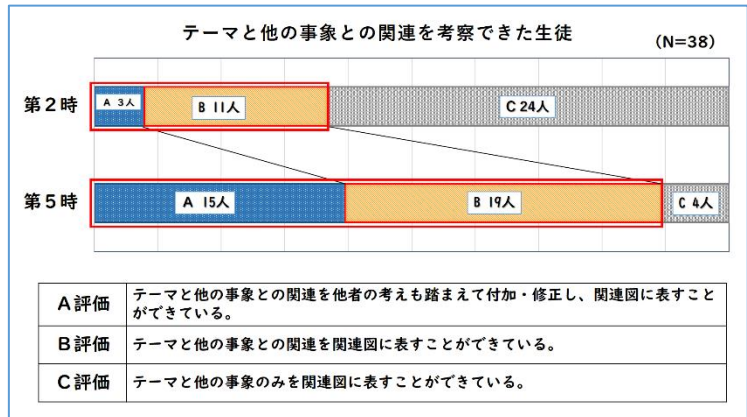
(5) 成果と課題

ア 研究の成果

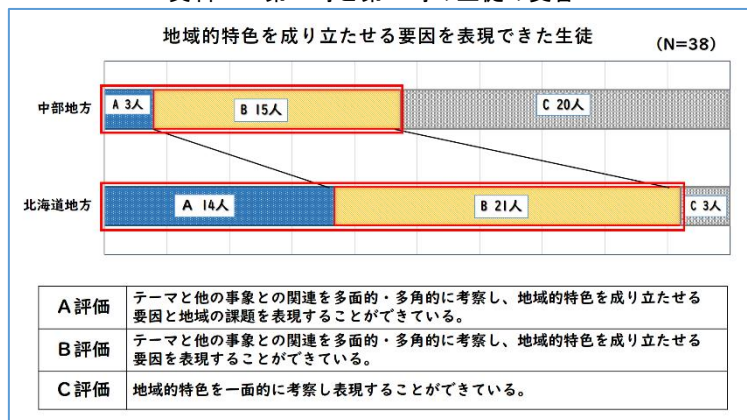
- 複数の事象の関連を明らかにする「予想を基に事象の関連を捉える問いと交流活動」を繰り返すことは、地域的特色の成立条件を多面的・多角的に考察するために有効であった。
- ICTを活用することは、学習活動の試行錯誤が容易になり、様々な事象を関連付けたり、関連付けた内容を整理したりすることに有効であることが究明できた。

イ 今後の課題

- 「予想を基に事象の関連を捉える問いと交流活動」の交流活動において、テーマと側面だけでなく、側面と側面のかかわりについても考察できるように単元を貫く学習課題を想起させる手立てが必要であった。



資料7 第2時と第5時の生徒の変容



資料8 中部地方と北海道地方の生徒の記述の変容

<引用文献>

- 1) 川端 裕介(2021) 『川端裕介の中学校社会科授業 見方・考え方を働かせる発問スキル 50』 p. 34 明治図書出版

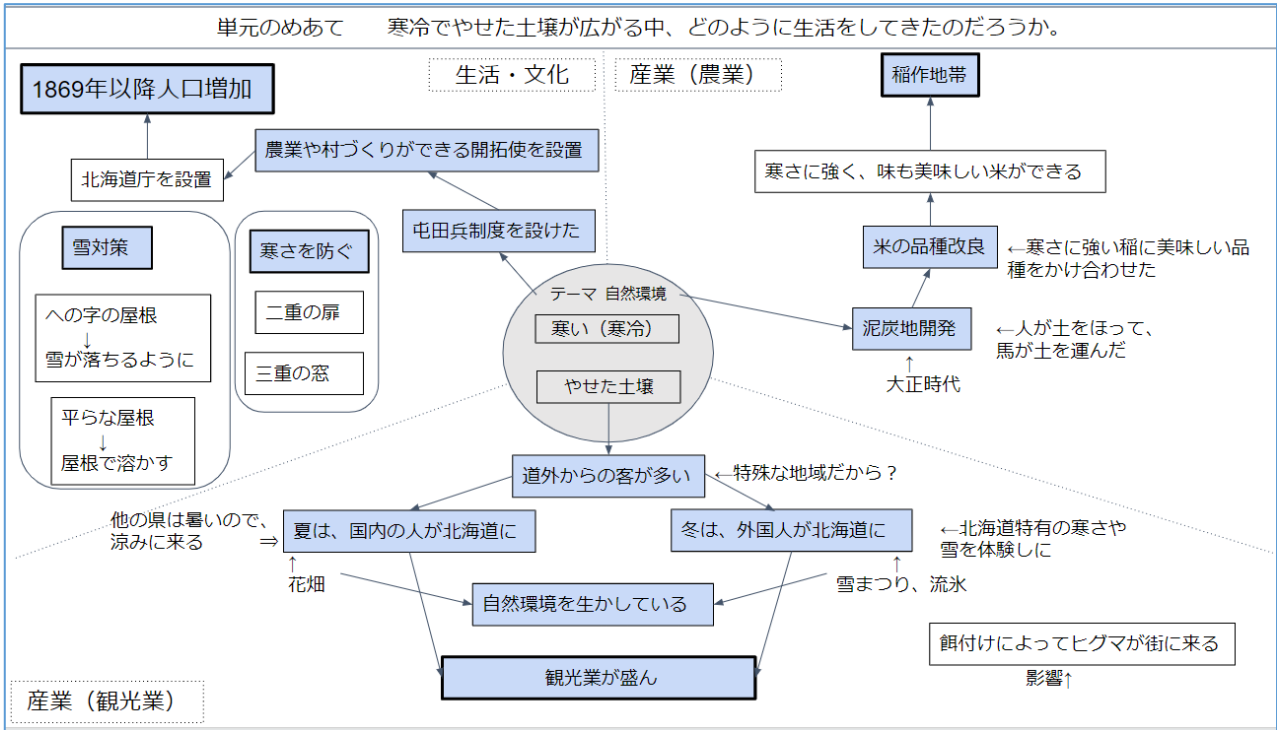
<参考文献>

- ・ 岩田 一彦(2001) 『社会科固有の授業理論・30の提言 ー総合的学習との関係を明確にする視点ー』 明治図書出版

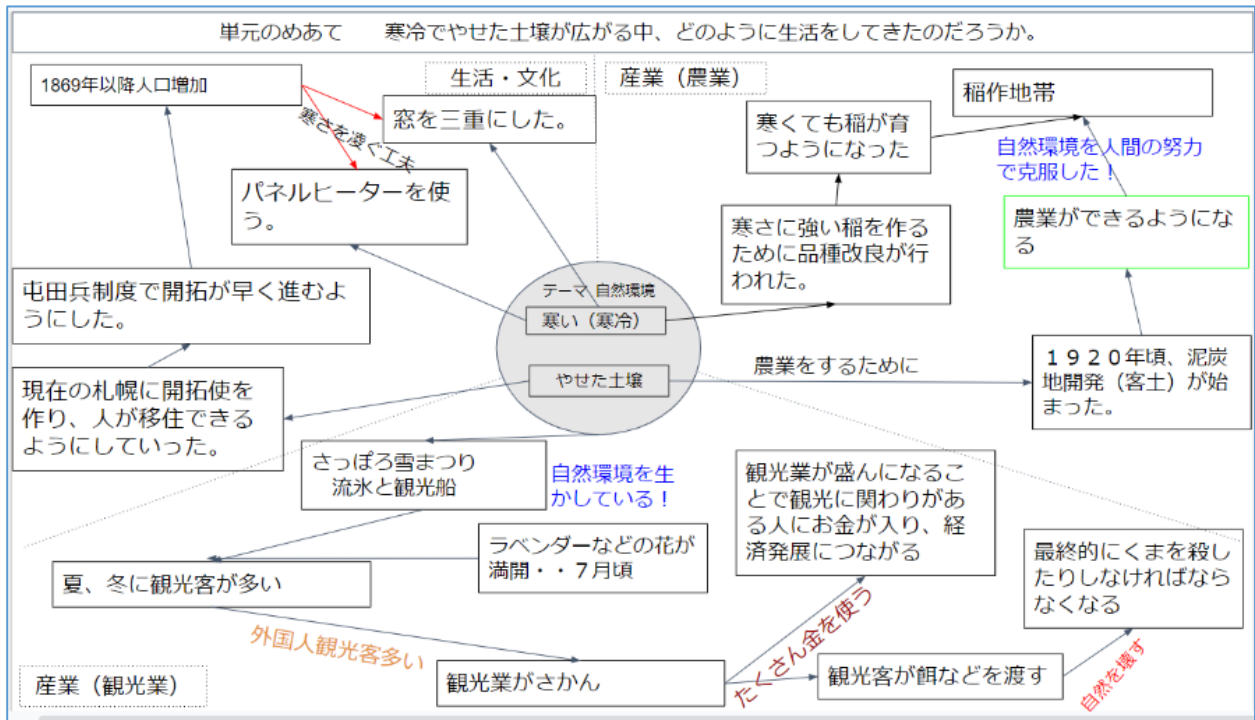
【添付資料】

○ 他の生徒の関連図と地域的特色の記述

北海道地方は、自然環境の長所は生活に生かし、短所は克服したり、それに合わせたり、時には変えたりして、自然と共存しながら生活してきた。



北海道地方は、寒冷な気候に対応し、克服したり生かしたりして生活してきた。



○ 問いの構造図

地理的分野 日本 の 諸地域 北海道地方

